

京都における「オルターナティブ・スペース」としての寺院

遠藤保子

【はじめに】

近年寺院において、パフォーマンスが盛んに行われるようになってきている。東大寺、金閣寺、比叡山延暦寺など知名度の高い寺院のほかに、道澄寺、法雲寺など比較的知名度の低い寺院でも開催されている。これらの寺院で行われるパフォーマンスは、それまでの寺院のイメージをこわし、日本の伝統的な建物に現代的な音と光と行為という組み合わせの意外性からくる物珍しさとミスマッチのおもしろさで注目されている。そこで、本研究ではこの寺院におけるスペースとパフォーマンスのかかりについて検討したい。

【京都の寺院におけるパフォーマンス】

京都の寺院におけるパフォーマンスは、運営方法によって次の3つに分類される。

- ①企画会社が委託をうけて行う場合
- ②アーティストの要請を受けて場を提供する場合
- ③寺院関係者が企画・運営・実行する場合

①には寺院関係者が企画するものと、それ以外の人々（アーティストや企画会社）が寺院に企画を持ち込むものがあるが、ともに実際の運営は企画会社や専門のプロジェクターが委託されて行う。具体的には前述した知名度の高い寺院に多い。②は、企画会社は関与せず寺院関係者がアーティストの要請によって場を提供する場合であり、例としては法然院、紫雲山永運院などがあげられる。そして③は、アーティストに加えて寺院関係者も積極的に企画・運営を行う場合であり、例としては道澄寺、法雲寺などがあげられる。

寺院における音楽や舞踊は仏教を広めようとした聖徳太子の頃から重用されていたように、寺院においてパフォーマンスを行うことは今に始まった新しいことではない。ただし、それらは仏を供養するために奉納されたものであった。ところが、①の寺院のように企画会社やプロジェクターが関与すると営利や集客力を追及する側面が重要視され、仏を供養するという宗教的側面が薄れていく傾向がみられる。それに対し、②と③の寺院では、営利追及を目的とせず、あくまでアーティストを援助するために場を提供している。この観点からすれば②と③の寺院を「オルターナティブ・スペース」としてとらえることが可能ではないだろうか。つまり、寺院は公の施設ではなくしかも営利を追及しないスペースである。しかし、寺院で奉納されていた音楽や舞踊の宗教的な意味内容は、今日におけるパフォーマンスの意味内容が必ずしも同じではなく、本来のオルターナティブ・スペースのように専門のキュレーターがいない。こうしたこ

とからここでは、「」つきのオルターナティブ・スペースとした。そこで、次に具体的な事例として②の法然院に限ってその現状を検討したい。

法然院は、京都市左京区鹿ヶ谷御所ノ段30番地「哲学の道」づたいの坂を東に登った所にある。この寺は、檀信徒の浄財によって伽藍の維持運営を行っている檀那寺であるが、専修念仏法然上人ゆかりの寺であるため全国から多くの信者が参拝に訪れ、また「哲学の道」に近い観光客が散策を楽しんでいる。そして今日アーティストを支援するという趣旨のもとに講堂、方丈、山門あるいは庭園においてさまざまな芸術活動「アート・イン・法然院」が開催されている。このように寺を一般の人々に解放した背景には、現在の貫主梶田真章の檀那寺として基本的な性格を逸脱しない範囲でさまざまな方々に喜んでもらう寺をめざすという、寺に対する新しい考え方が反映されている。彼によれば「それが単に会場を貸すだけに終わったり、企業の宣伝に利用されたのでは意味がなく、住職の精神的関与があってこそ文化の場としての寺院が担える」と述べている。（京都新聞'92年2月2日）「アート・イン・法然院」の催しは、平均すると月に2回多いときは毎週行われ、その内容はインスタレーション、新世代音体験、インドのカタックダンスなど世界各国の、しかもさまざまなジャンルのアーティストが利用している。プログラムをみると、法然院ならではの自然や環境を生かした、あるいは環境を取り込んでアートにしている傾向がみられ、ここを利用したアーティストからは、例えば演奏中に小鳥が競い合うようにさえずりだし、劇場では味わえない刺激と興奮を味わったという感想も寄せられている。

【「オルターナティブ・スペース」としての寺院】

「オルターナティブ・スペース」としての寺院にみられる特徴は、①アーティストの支援を目的にスペースが提供され、使用料は無料に近いことから経済的にも援助していることになり、結果的にアーティストを育成することにもなり、②アーティスト支援・育成を通じて地域社会に貢献し、③アーティスト育成に関しては、単にスペースの提供者経済的支援だけではなく仏につかえる立場からの精神的関与をとおしての仏教的バックアップをし、④アーティストは、寺院という環境と観客と共に従来の劇場では体験できないパフォーマンスを創作でき、⑤パフォーマンスをとおして日本の文化を再認識でき、外国のアーティストとのパフォーマンスは国際交流にもつながる。

こうした特徴と本来のオルターナティブ・スペースの特徴を比較すると、さまざまな相違はあるにせよ機能面では同じであることがわかる。

参考文献 ①小林進「オルターナティブ・スペース論 場の問題」『ダンスワーク40』'89 ②梶田真章「文化を発信する環境保全都市に」『京都』石田大成社'93年9月 など